

郡山女大家政。須田秀幸，高館作夫，関口富左，影山弥，真船均

目的 ①すでに見たように，現代の精神状況は故郷喪失として特徴づけられている。  
 ②それは実存主義や文学という限られた領域につきない。③家や家族の崩壊は多くの学者によって予測されている（ホルクハイマー，トフラー等）。④大家族制→核家族，という家族の変態は今や核家族の発散をもって終結すると予測されている。  
 ⑤家政学の中核である〈家〉〈家族〉が，このように将来において否定された場合，家政学の学問としての存続意義はどこにあるのか？この中心課題を検討する。

方法 ①この問題解決のカギは，家および家族はどうあるべきかという問題と不可分に結びついている。②〈あるべきか〉は，価値観つまり哲学の問題でもある。そこで哲学的吟味を加える。

結果 ①自然科学的思考とそれに基づく技術文明の著しい進展は，結果的には人間を部品化し，人間疎外をもたらした。②それはまた家族の中にも侵入し，家族の成員相互の精神的絆を切断する（ホルクハイマー）。③社会契約説による家族の株式会社化，また人間中心主義の極端化による思い上りも家族破壊の要因をなしていえよう。④しかし人間が全般に生長するためには，こうしたことに抗して，家の被護性（Geborgenheit）がなければ果されない（ボルノー）。⑤いずれにせよ，家政学の意義はこの点の吟味を通しはじめて，現代において積極的意味をもちうるのではないかと考える。